園長通信～こころ～ №５１

シチリア事件

2024.6.18

今思うと、なぜあのときシチリアに行ったのか。あれは、イタリアで暮らすようになって１年目の冬だった。イタリア国内の旅行先としてシチリアを選んだ。シチリアと言えば、治安が決していいとは言えないのにもかかわらずである。この島は、歴史上の経緯から、様々な文化が交錯し、独特かつ魅力的な場所となっている。ローマからは距離があるため、まとまった日程が取れないと、なかなか行くことができない観光地である。

飛行機で行き、レンタカーを借りた。予算を考え、下のクラスの小型車にしたのが、後の悲劇の元となった。途中までは、順調だった。日程の半ば頃だっただろうか。夕食をとるために、ホテルの廊下を歩いていた。２歳半の息子は、いつものように楽しそうに歩いていた。利き手である左手には、巾着袋のようなものを持っていた。

その息子が、急にこてっと倒れた。どうやら、巾着袋を自分で踏んづけたらしかった。泣き出した。ここまでは、よくあることだった。しかし、泣き方が尋常ではなかった。いつまでも泣き止まない。家人がすぐに反応した。病院に行った方がよい。

イタリアに来てまだ１年も経っていない。イタリア語がおぼつかない。とにかくホテルのフロントで救急病院を聞き、車で向かった。あの頃は、ナビもなかった。人間、追い込まれると、何とかするものである。そのことを、あのとき、シチリアで学んだ。

どうにかこうにか病院にたどり着いた。症状を説明した。左ですと説明したのだが、右の方をレントゲンで撮ろうとした。ここらへんが、イタリアである。撮影した画像を見ると、左の鎖骨がきれいに折れていた。治療と言っても、左腕を包帯で固定するくらいだった。

ここまで、活躍していたのは家人だった。この当時も、その後も、私よりも家人のイタリア語力の方が上だった。私は、学校に行くと日本語である。家人はというと、息子を連れて、イタリア人社会の中で生きていた。

息子の左腕が固定されたまま、旅は続行となった。ようやく最終日となった。飛行機の時間まで余裕があった。車をとめて街を散策することにした。これで、やっとローマに帰ることができる。ちょっとホッとしてしまったのかもしれない。油断があった。

散策を終え、車に戻ると、トランクが開いていた。やられた。大きなスーツケースが消えていた。再びピンチ到来である。いろいろなことが頭を駆け巡った。中身には金目の物はない。きっとそのへんに捨てられているに違いない。必死で探した。だが、期待は裏切られた。たくましい家人が、聞き込みを始めた。どうやら、バイクに乗った若い二人組が持って行ったとのことだった。やれることはすべてやった。最善策は、とりあえずローマに帰ることだった。

幸いにも、パスポートは身に付けていた。だが、肝心の飛行機のチケットがない。スーツケースの中だった。困った。ここでも、家人の火事場のイタリア語力が発揮された。空港の航空会社のカウンターで事の次第を説明した。どうにかこうにか出発数分前の飛行機に滑り込んだ。もちろん、息子の左腕には、もはや固定の役目を果たしていない包帯があった。

ローマの空港に着いた。荷物もなく、息子は骨折中だった。それでも、帰ることができたことに安堵した。以上が、我が家のシチリア事件である。我が家最大のピンチであった。今思うと、懐かしい。いろいろなことがありすぎたシチリアだった。それでも、シチリアは好きである。あの１月のシチリアの太陽は眩しかった。